

【各学科における理念】

● 文芸学部国文学科 (中学校教諭一種(国語)・高等学校教諭一種(国語))

国文学科では、文学作品のみならず、日本語で表現されたあらゆる文献を対象とし、その様々な「文(あや)」を日本及び日本人の特質として学ぶことによって、人間存在を真に理解した社会人の育成を目的とする。

教職課程においては、古代から現代までの各時代別、また日本学の根幹でもある国語学・漢文学といった分野別の演習・講義科目において広く修得・研究出来るとともに、古典を声に出して体で覚える音読・暗誦を行う科目(素読)を必修科目とすることで、たくましい知性とゆたかな感性を兼備した国語科教員の養成を目指している。

【段階的目標とその計画】

<国文学科> (中学校教諭一種(国語))

履修年次	到達目標と計画	
年次	時期	
1年次	前期	教職課程登録前の導入として、1年次中に「教職に関する科目」の中でも基礎科目と位置付けている「教師論」「教育原論Ⅰ・Ⅱ」を履修することにより、教職課程の意義・制度及び教員の役割等を学び、教職課程への意欲を喚起するとともに、教職への適性を自己評価し、意欲のある学生を2年次の教職課程登録に導くことを目標とする。また、2年次以降計画的に「教職に関する科目」「教科に関する科目」に専念出来るよう、1年次には「教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目」を履修する。古典の基礎訓練としての素読(演習)科目、国語国文学への入門編たる概説(概論)科目は、この年次において履修する。特に、素読(演習)は2年次以降に展開される作品分析のための土台となる言語感覚を、声を出し暗誦することによって深く身に付けさせる訓練である。前期後期に2科目、1年次中で計4種類の科目を履修する。概説(概論)科目は、いわば入門的科目であり、ここでは作品の歴史的背景や古典籍としての形態の変遷、また、言語の変化の様態を修得することによって、個々のテキストを歴史の中に位置付けることを学ぶ。
	後期	引き続き、教職課程登録前の導入として、1年次中に「教職に関する科目」の中でも基礎科目と位置付けている「教師論」「教育原論Ⅰ・Ⅱ」を履修することにより、教職課程の意義・制度及び教員の役割等を学び、教職課程への意欲を喚起するとともに、教職への適性を自己評価し、意欲のある学生を2年次の教職課程登録に導くことを目標とする。また、2年次以降計画的に「教職に関する科目」「教科に関する科目」に専念出来るよう、1年次には「教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目」を履修する。古典の基礎訓練としての素読(演習)科目、国語国文学への入門編たる概説(概論)科目は、この年次において履修する。特に、素読(演習)は2年次以降に展開される作品分析のための土台となる言語感覚を、声を出し暗誦することによって深く身に付けさせる訓練である。前期後期に2科目、1年次中で計4種類の科目を履修する。概説(概論)科目は、いわば入門的科目であり、ここでは作品の歴史的背景や古典籍としての形態の変遷、また、言語の変化の様態を修得することによって、個々のテキストを歴史の中に位置付けることを学ぶ。
2年次	前期	教職課程登録を経て、本格的に教職課程のスタートとなり、「教職に関する科目」では、2年次中に「教育史」「教育方法学」「特別活動の研究」「教育心理学」もしくは「青年心理学」を履修することにより、教科横断的に、また、教科領域と教科外領域のどちらでも必要となる教育学や心理学の理論に基づいた実践力を身に付けていくことを目標とする。「教科に関する科目」は、選択科目として専門の「会読(演習)」「講義」科目が設定してある。将来の教材研究を見据えて、「会読(演習)」では作品の細かい分析の基礎訓練をすべく、注釈とその考察を、発表・議論の形式で行う。「講義」では、作品論・作家論、歴史・哲学・宗教、また、絵画や口承文芸等の周縁分野からのアプローチ、更には作品個々の書誌学的研究等を学び、より立体的に作品を把握することを修得する。
	後期	引き続き、「教職に関する科目」では、2年次中に「教育史」「教育方法学」「特別活動の研究」「教育心理学」もしくは「青年心理学」を履修することにより、教科横断的に、また、教科領域と教科外領域のどちらでも必要となる教育学や心理学の理論に基づいた実践力を身に付けていくことを目標とする。「教科に関する科目」は、選択科目として専門の「会読(演習)」「講義」科目が設定してある。将来の教材研究を見据えて、「会読(演習)」では作品の細かい分析の基礎訓練をすべく、注釈とその考察を、発表・議論の形式で行う。「講義」では、作品論・作家論、歴史・哲学・宗教、また、絵画や口承文芸等の周縁分野からのアプローチ、更には作品個々の書誌学的研究等を学び、より立体的に作品を把握することを修得する。
3年次	前期	3年次を迎え、「教職に関する科目」では、「国語科教育法」「生徒指導の研究」「道徳教育の研究」を履修することにより、翌年度の教育実習に向けて、理論と実践力の応用を身に付けることを目標とする。特に、「国語科教育法」では、教科の指導案の作成・教育方法、授業を行う際に配慮する点等を学ぶとともに、模擬授業を行い、翌年度の教育実習に向けて研鑽を積むことを目標とする。また、「生徒指導の研究」と「道徳教育の研究」を通じて、現代の学校現場で生じている諸問題への対処、現代の生徒に要請されている道徳、倫理等についての見識を学問的実践的に蓄積することを目指す。「教科に関する科目」では、前年次に引き続き、選択科目である専門の「会読(演習)」「講義」科目を履修して、教科への理解・教養を更に深めることを目標とする。更に、本年度より「ゼミナール」に所属し、卒業論文作成のための基礎的技術を修得する。
	後期	引き続き、「教職に関する科目」では、「国語科教育法」「生徒指導の研究」「道徳教育の研究」を履修することにより、翌年度の教育実習に向けて、理論と実践力の応用を身に付けることを目標とする。特に、「国語科教育法」では、教科の指導案の作成・教育方法、授業を行う際に配慮する点等を学ぶとともに、模擬授業を行い、翌年度の教育実習に向けて研鑽を積むことを目標とする。また、「生徒指導の研究」と「道徳教育の研究」を通じて、現代の学校現場で生じている諸問題への対処、現代の生徒に要請されている道徳、倫理等についての見識を学問的実践的に蓄積することを目指す。「教科に関する科目」では、引き続き、選択科目である専門の「会読(演習)」「講義」科目の履修によって、教科への理解・教養を更に深めることを目標とする。更に、「ゼミナール」においては、卒業論文作成のための基礎的技術を修得する。
4年次	前期	4年次を迎え、「国語科教育実習」を履修し、必要な事前指導を受けた後、教育実習校に赴く。各教育実習校において、教職員のご指導の下、教師に必要な基礎(知識・技術・態度)を履修し、教育に関する理解を深め、教師として活躍出来る素地を養うこと、また、生徒との関わりを通じ、教師の仕事は授業を行うことだけではなく、特別活動や課外活動の支援、学校の維持運営等にも及んでいることを理解し、教職への意欲を高めることを目標とする。「ゼミナール」では引き続き、論文作成のための訓練を受けつつ、「卒業論文」執筆に着手する。また、必修の「書道」を履修し、毛筆・硬筆、様々な書体で正しく美しく文字を書くという、最も実践的かつ根元的な技術の修得を目指す。
	後期	「国語科教育実習」での事後指導により、教育実習を振り返り、更に研鑽を積むこと、また、「教職実践演習」では教職課程の総括として、学問的知見と教育実習等を通じて得られた教科・生徒指導力、学級経営、対人関係能力という実践的見識とを統合するとともに、公共的使命に裏打ちされた教員資質の構築を目標とする。「ゼミナール」では引き続き論文作成のための訓練を受けつつ、最終的には「卒業論文」を完成させる。また、必修の「書道」を履修し、毛筆・硬筆、様々な書体で正しく美しく文字を書くという、最も実践的かつ根元的な技術の修得を目指す。

【段階的目標とその計画】

<国文学科> (高等学校教諭一種(国語))

履修年次		到達目標と計画
年次	時期	
1年次	前期	教職課程登録前の導入として、1年次中に「教職に関する科目」の中でも基礎科目と位置付けている「教師論」「教育原論Ⅰ・Ⅱ」を履修することにより、教職課程の意義・制度及び教員の役割等を学び、教職課程への意欲を喚起するとともに、教職への適性を自己評価し、意欲のある学生を2年次の教職課程登録に導くことを目標とする。また、2年次以降計画的に「教職に関する科目」「教科に関する科目」に専念出来るよう、1年次には「教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目」を履修する。古典の基礎訓練としての素読(演習)科目、国語国文学への入門編たる概説(概論)科目は、この年次において履修する。特に、素読(演習)は2年次以降に展開される作品分析のための土台となる言語感覚を、声を出し暗誦することによって深く身に付けさせる訓練である。前期後期に2科目、1年次中で計4種類の科目を履修する。概説(概論)科目は、いわば入門的科目であり、ここでは作品の歴史的背景や古典籍としての形態の変遷、また言語の変化の様態を修得することによって、個々のテキストを歴史の中に位置付けることを学ぶ。
	後期	引き続き、教職課程登録前の導入として、1年次中に「教職に関する科目」の中でも基礎科目と位置付けている「教師論」「教育原論Ⅰ・Ⅱ」を履修することにより、教職課程の意義・制度及び教員の役割等を学び、教職課程への意欲を喚起するとともに、教職への適性を自己評価し、意欲のある学生を2年次の教職課程登録に導くことを目標とする。また、2年次以降計画的に「教職に関する科目」「教科に関する科目」に専念出来るよう、1年次には「教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目」を履修する。古典の基礎訓練としての素読(演習)科目、国語国文学への入門編たる概説(概論)科目は、この年次において履修する。特に、素読(演習)は2年次以降に展開される作品分析のための土台となる言語感覚を、声を出し暗誦することによって深く身に付けさせる訓練である。前期後期に2科目、1年次中で計4種類の科目を履修する。概説(概論)科目は、いわば入門的科目であり、ここでは作品の歴史的背景や古典籍としての形態の変遷、また言語の変化の様態を修得することによって、個々のテキストを歴史の中に位置付けることを学ぶ。
2年次	前期	教職課程登録を経て、本格的に教職課程のスタートとなり、「教職に関する科目」では、2年次中に「教育史」「教育方法学」「特別活動の研究」、「教育心理学」もしくは「青年心理学」を履修することにより、教科横断的に、また、教科領域と教科外領域のどちらでも必要となる教育学や心理学の理論に基づいた実践力を身に付けていくことを目標とする。「教科に関する科目」は、選択科目として専門の「会読(演習)」「講義」科目が設定してある。将来の教材研究を見据えて、「会読(演習)」では作品の細かい分析の基礎訓練をすべく、注釈とその考察を、発表・議論の形式で行う。「講義」では、作品論・作家論、歴史・哲学・宗教、また、絵画や口承文芸等の周縁分野からのアプローチ、更には作品個々の書誌学的研究等を学び、より立体的に作品を把握することを修得する。
	後期	引き続き、「教職に関する科目」では、2年次中に「教育史」「教育方法学」「特別活動の研究」、「教育心理学」もしくは「青年心理学」を履修することにより、教科横断的に、また、教科領域と教科外領域のどちらでも必要となる教育学や心理学の理論に基づいた実践力を身に付けていくことを目標とする。「教科に関する科目」は、選択科目として専門の「会読(演習)」「講義」科目が設定してある。将来の教材研究を見据えて、「会読(演習)」では作品の細かい分析の基礎訓練をすべく、注釈とその考察を、発表・議論の形式で行う。「講義」では、作品論・作家論、歴史・哲学・宗教、また、絵画や口承文芸等の周縁分野からのアプローチ、更には作品個々の書誌学的研究等を学び、より立体的に作品を把握することを修得する。
3年次	前期	3年次を迎え、「教職に関する科目」では、「国語科教育法」「生徒指導の研究」「道徳教育の研究」を履修することにより、翌年度の教育実習に向けて、理論と実践力の応用を身に付けることを目標とする。特に、「国語科教育法」では、教科の指導案の作成・教育方法、授業を行う際に配慮する点等を学ぶとともに、模擬授業を行い、翌年度の教育実習に向けて研鑽を積むことを目標とする。また、「生徒指導の研究」と「道徳教育の研究」を通じて、現代の学校現場で生じている諸問題への対処、現代の生徒に要請されている道徳、倫理等についての見識を学問的実践的に蓄積することを目指す。「教科に関する科目」では、前年次に引き続き、選択科目である専門の「会読(演習)」「講義」科目を履修して、教科への理解・教養を更に深めることを目標とする。更に、本年度より「ゼミナール」に所属し、卒業論文作成のための基礎的技術を修得する。
	後期	引き続き、「教職に関する科目」では、「国語科教育法」「生徒指導の研究」「道徳教育の研究」を履修することにより、翌年度の教育実習に向けて、理論と実践力の応用を身に付けることを目標とする。特に、「国語科教育法」では、教科の指導案の作成・教育方法、授業を行う際に配慮する点等を学ぶとともに、模擬授業を行い、翌年度の教育実習に向けて研鑽を積むことを目標とする。また、「生徒指導の研究」と「道徳教育の研究」を通じて、現代の学校現場で生じている諸問題への対処、現代の生徒に要請されている道徳、倫理等についての見識を学問的実践的に蓄積することを目指す。「教科に関する科目」では、引き続き、選択科目である専門の「会読(演習)」「講義」科目の履修によって、教科への理解・教養を更に深めることを目標とする。更に、「ゼミナール」においては、卒業論文作成のための基礎的技術を修得する。
4年次	前期	4年次を迎え、「国語科教育実習」を履修し、必要な事前指導を受けた後、教育実習校に赴く。各教育実習校において、教職員のご指導の下、教師に必要な基礎(知識・技術・態度)を履修し、教育に関する理解を深め、教師として活躍出来る素地を養うこと、また、生徒との関わりを通じ、教師の仕事は授業を行うことだけではなく、特別活動や課外活動の支援、学校の維持運営等にも及んでいることを理解し、教職への意欲を高めることを目標とする。「ゼミナール」では引き続き、論文作成、作品分析のための訓練を受けつつ、「卒業論文」執筆に着手する。
	後期	「国語科教育実習」での事後指導により、教育実習を振り返り、更に研鑽を積むこと、また、「教職実践演習」では教職課程の総括として、学問的知見と教育実習等を通じて得られた教科・生徒指導力、学級経営、対人関係能力という実践的見識とを統合するとともに、公共的使命に裏打ちされた教員資質の構築を目標とする。「ゼミナール」では引き続き論文作成、作品分析のための訓練を受けつつ、最終的には「卒業論文」を完成させることをもって総仕上げとする。